



## **Racial capitalism and reproductive tourism: field work in India.**

人種資本主義と生殖ツーリズム：インドでの  
フィールドワークから

Interviewee

Dr. Daisy Deomampo

### **Q. 研究者としてのバックグラウンド、専門領域、研究歴について教えてください。**

文化人類学、医療人類学が専門領域。研究対象としては、科学技術研究、ジェンダーと健康、生命倫理と社会正義が含まれる。特に、人種とジェンダーが生殖に関する意思決定プロセスにどのように影響するかに興味がある。国境を越えた代理出産の研究を通じて、生殖補助医療(ART)が人種やジェンダーについての人々の理解をどのように明るみに出すのか、そして権力と不平等の構造が国境を越えた文脈でARTを使用する人々の動機と経験に、どのように影響するかを探究した。

現在進めているプロジェクトでは、米国のアジア系アメリカ人の間での配偶子提供（特に卵子提供）に焦点を当てている。なぜ人々はアジア系の卵子を探すのか、なぜ人々は卵子を提供するのか、どのような人種の構造がそれらの人々の経験や動機に影響を与えるのかという問題に取り組んでいる。

### **Q. これまでに実施した研究について、研究の目的、方法と、主要な知見について教えてください。**

インドでの国境を越えた代理出産に関する研究は、博士論文のための研究プロジェクトだった。当時、国境を越えた代理出産に関する研究はほとんど行われていなかったため、実際に現地で何が起きているかを理解するた

めにインドに向かった。既存の代理出産研究の多くは、親族関係と、代理母が子供や依頼親との関係で自分自身をどのように認識しているかに焦点をあてていた。しかし、プロジェクトを進める中で、人種階層があることがわかり、さまざまな人々が人種の観点から代理出産の関係性においてどのようなアクターを演じているかに興味を持った。

調査では、主にインタビュー法を用いた。複数の調査地で、18か月以上にわたってフィールドワークを実施し、最長で約12か月間滞在した。国境を越えた代理出産を制限する議論は、この時点のインドですすでに行われていた。

フィールドワークでは、幅広い視点を得るために、プロセスに関与するすべての人々にインタビューを行う必要があった。代理出産サービスを求めてインドに渡航する人々（米国、西ヨーロッパ、オーストラリアから）、代理母、卵子ドナー、クリニックスタッフ、エージェント、エージェントとなった元代理母、法律家などにインタビューした。

### **Q. フィールドワークについて教えてください。どのようにフィールドに入っていましたか？**

人類学者としての立場が、フィールドワークを行う際に大きな違いを生んだと思う。主にロコミ(スノーボールサンプリング方法)を使用して人々にアクセスした。誰かにインタビューし、その相手に他の誰かを紹介してくれるよう依頼した。当時、ブログは非常に人気があり、オンラインを使用して人々にアクセスした。一部の医師も、インタビュー対象者を紹介してくれた。最初、関係を築くのにしばらく時間がかかったが、プロジェクトは長期に及ぶものだったから、そのための時間はあった。

研究対象者が自分の存在に慣れ、自分がジャーナリストではなく研究者であることがわ



かり、彼らともっと距離が縮まった。当時、ジャーナリストに対して疑いの念が生じていた。彼らは、国境を越えた代理出産の禁止に関する議論をしていたから。

代理母や卵子ドナーへのインタビューは、医師へのインタビューとは少し異なっていた。女性たちは、研究プロトコルや、倫理委員会で承認を得ているかどうかについてあまり関心がなかった。彼女たちは守秘性について心配していた。また、代理母やドナーになる動機についてのストーリーを共有する機会を求めている。自分たちの権利擁護に尽力し、プロセスにおいてより大きな交渉力を獲得することを望んでいました。

#### Q.フィールドワークで印象的だったエピソードはありますか？

Antara という女性が印象的だった。彼女は、本の中で主要な登場人物の一人となっている。彼女は、インドが外国人依頼者にとって人気のある目的地になる前に、北インドから来たインド人カップルのために代理母をした。彼女は非常に頭が良く、知識が豊富で、代理母としての経験から得たお金が彼女にとって人生を変えるものではないことを知っていた。彼女は代理母の経験を生かし、エージェントとして業界で活動することを選択し、コミュニティの信頼できるメンバーになり、ビジネスウーマンとしての地位を確立した。彼女はコミュニティから女性をリクルートしてクリニックに女性を紹介し、クリニックによって女性たちがきちんと世話をされ、彼女たちのニーズが満たされているかどうか確認する活動を行い、女性たちの指導者となっていった。これは、彼女に社会的上昇の可能性を与えた。彼女はお金を節約して家を買うことができた。Antara とは、調査中に多くの時間を一緒に過ごし、インタビュー対象者の大半を紹介してくれた。調査研究の中で彼女の存在は際立っている。

Antara のお陰で、代理母がインドで直面している課題を理解することができた。これにより、代理母になった女性たちの物語が何を意味するのか、批判的に考察することができた。当時の多くの研究やメディア報道では、女性たちは貧しく、疎外され、教育を受けておらず、主体性がないと一般化され、意志に反して代理出産をさせられていたというものだった。しかし、実際には多くの女性が自分から代理母になりたいと熱望しており、代理出産が社会的上昇の手段と見なされていたことを知って驚いた。

#### Q. インドで代理母になって、最も成功した女性や家族の事例を教えてください。

Antara は、代理出産によって成功した人物の代表だと言える。しかしそれは、代理母になったことによってではなく、エージェントになることによってだった。

ある代理母は、娘の結婚式の支払いと家を購入するため、お金を貯めたいと言っていた。つまり、彼女は経済的安定を求めている。彼女は期待した金額を受け取ったが、目標を達成するには足りなかった。結局、彼女は家の頭金を払うために家族の宝飾品を売らなければならなかった。別の女性は、代理出産の報酬を受け取った後の家族の亀裂について話した。彼女が報酬をもらったあと、親戚が突然現れてお金を求めてきた。これは、代理出産が一部の女性にとって借金の返済や財政的危機の克服を助けた一方で、他の女性にとっては、お金がすぐに蒸発し、代理出産のサイクルを繰り返すように導いたことを示している。

#### Q. 代理母やエージェントになって経済的に自立し、不毛な結婚生活から離脱することに成功した女性はいましたか？（またはそのような目的で代理母になった女性はいましたか？）



生活を完全に变える目的で代理母になると述べた女性はいなかった。ほぼすべての代理母はすでに子供を持っていたので、彼女たちの優先順位は子供をサポートすることだった。夫婦間の対立や未亡人の女性もいたが、その後離婚したかどうかはわからない。2010年に調査した時、代理母になったことで、夫との関係が緊張し、ストレスを感じたと述べた1人の女性を思い出す。彼女は、代理出産が彼女の家庭の力のバランスを変え、彼女の夫を不幸にし、夫婦の間に不信感が広がったと述べた。

**Q. インド全土で行われている代理出産や卵子提供には、どのような地域性、あるいはカースト、宗教、階層による差異がありますか。**

インド全土をいろいろ移動した。しかし、自分が調査したクリニックやエージェントのほとんどは、マハラシュトラ州のムンバイに拠点を置いていた。

代理出産は、特定の医師に大きく依存していた。グジャラート州には代理母のための大規模なホステルがあり、当時そこにいた女性にとって(出産)コミュニティになっていた。しかし、ムンバイではそうではなかった。大規模なホステルがなかったため、女性たちは分散して生活していた。また、クリニックの運営方法もそれぞれ異なり、医師の考え方もそれぞれ異なっていた。当時は規制がなく

(ガイドラインのみ)、医師やエージェントは各々自分たちの視点で最も効果的だと思う方法でルールを設定していた。代理母をコミュニティから引き離してクリニックの近くに住ませる場合もあれば、家で過ごすことを勧める場合もあった。

代理母の間に大きな違いは見られなかった。一般的に、彼女たちは皆教育レベルが低く、お金を必要としていた。ほとんどがヒンズー教徒で、一部はイスラム教徒だった。Antaraは自分をキリスト教徒だと言ったが、

ももとはヒンドゥー教徒の家庭で生まれた。カーストについては質問しなかった。

**Q. 妊娠中、<代理母ハウスで生活し、家族と離れて過ごした女性>、<自宅で生活した女性と家族>、それぞれ、どんな経験をしていましたか?**

一つの建物(厳密にはホステルではない)の別々の部屋で生活していた女性たちにインタビューをした。代理母になっていることを近隣住民に知られたくなかったので、その場所に引っ越していた。日常生活のルーチンから離れていたため、毎日非常に退屈だと言っていた。また、移動が制限されていたため、閉じ込められているように感じて、それが精神的健康に影響を及ぼしていた可能性がある。

妊娠中、家で過ごしていた代理母は別の問題に直面していた。彼女たちは妊娠を管理しながら、家庭での責任を果たしていた。多くの女性は近隣住民や親戚に代理出産について隠していたので、出産後、赤ちゃんを亡くしたと伝えるつもりだった。家の中で葛藤を経験していた女性もいた。夫とのドラマ、不貞など、別のストレスが生じていた。家庭内での対立が原因で、代理母は別の村にある実家に戻ってしまったケースもあった。しかしそれはクリニックの規則に違反していた。

**Q. 外国人依頼者が禁止になったあと、インドのクリニックや代理母たちはどのようにして経済的活動を維持していますか?**

国境を越えた代理出産が禁止されてから、クリニックや医師と連絡を取っていない。しかし、代理母からエージェントに転身したAntaraと連絡を取っている。彼女は現在、別の分野で自分のビジネスを運営している。代理出産業界は、ほとんど枯渇してしまった。



最後にインドに行ったのは2014年だった。彼女たちは国境を越えた代理出産が終わりに近づいていることを知っていた。2010年は非常に強い需要があったため、代理母と依頼者をマッチングするのは容易だったが、2014年に状況はシフトし、国際的な需要は減少した。国内での需要が増加し、スティグマは少なくなったが、それは必ずしも代理母の経済的利益につながるわけではなかった。

**Q. インド人の代理母と定期的に交流している外国人依頼者はいましたか？**

自分が知る範囲では、依頼者と交流していた代理母はいなかった。互いに会うことさえまれだった。依頼者と代理母がコミュニケーションをとるかどうかは、医師の考え次第だった。会う場合は、クリニックが間に入ることになる。

依頼者にインタビューほしたが、代理母との接触を望んでいる人もいれば、そうでない人もいた。代理母と連絡を取り合うためにインドに戻ったあるカップルを思い出す。しかし、インドのクリニックの記録はいい加減なので、代理母に会うのは非常に困難だった。

**Q. “コスモポリタンな家族” についてのストーリーはどのように構成されていましたか。**

子供の受胎物語 (conception story) を位置付けるための様々なアプローチを観察した。これらは、「世界の子供たち ‘children of the world’」の場合に特に重要。多くの依頼者にとって、国境を越えた代理出産の使用は、最後の手段だった。彼らは自国で何度も ART に失敗し、養子縁組も試みた。このことは、彼らの価値観と卵子ドナーを選ぶ際に何を優先するかという問いを提起する。そのようなとき、「コスモポリタン」な物語は、自分たちの選択を理解可能なものにするのに役立つ。

受胎物語を構成する、人種と民族に関するある種の理解に特に興味を持った。たとえば、出自をめぐるストーリーを伝えるためにインドまたはインドの女性をどのように位置付けるか。これは、異国情緒とオリエンタリズムのプロセスにしばしば依存している。

**Q. 白人の女性が、自分で産むために、(暗い肌の色の) インド人の卵子ドナーを希望する例はありましたか？**

自分はそのような事例に出会わなかった。しかし、そういうこともありうる想定する。

**Q. その他コメント。これからやりたい研究など。**

これから、本の執筆に入りたいと思っている。来年、講義を休む予定なので、米国での卵子提供に関して収集したデータの分析と本の草案作成に集中する。焦点は、米国の資本主義構造の文脈で、人種資本主義の枠内での卵子提供と、この技術が特定の人種資本主義構造をどのように支え、強化するかに焦点を当てる。

将来、さらなるフィールドワークのためにインドにも渡航することを希望するが、現時点では具体的な計画はない。

(2022年3月)



**Daisy Deomampo** [Link](#)

フォーダム大学の准教授。医療人類学と文化人類学が専門。インドでフィールドワークを行い、学位を取得した。人種資本主義と卵子提供の関わりに関心があり、米国の卵子提供における人種の階層構造を分析している。

2016 Transnational Reproduction: Race, Kinship, and Commercial Surrogacy in India (Anthropologies of American Medicine: Culture, Power, and Practice Book 1) (English Edition)

